2011 年度　広島文教女子大学　司書講習
「図書館資料論」参考文献（順不同）
－授業の中で、また授業を終えてからも、より深く学ぶために－

[テキスト類]
<1>宮沢厚雄『図書館情報資源概論』理想社，2010.
<2>馬場俊明（編著）『図書館資料論』日本図書館協会，2009.
<3>小黒浩司（編著）『図書館資料論』新訂版，東京書籍，2008.
「図書館資料論（図書館情報資源概論）」のテキスト類は、今回採用した樹村房のもの以外にもいくつかあるが、内容の新しさと詳しさという点で、この 3 点をまず挙げておきたい。もっとも、全体的な記述のバランスという点では樹村房のものが優れている、というのが古賀の印象である。

[本と出版をめぐって]
<4>永江朗（監修）『あたらしい教科書　2　本』プチグラパブリッシング，2006.
<5>永江朗『本の現場：本はどう生まれ、だれに読まれているか』ポット出版，2009.
本をめぐる様々な事柄が分かりやすく書かれている。<4>はいわば「総論」で、本のデザインや著名な編集者にも言及。<5>はより具体的な論点に迫る。

<6>湯浅俊彦『電子出版学入門：出版メディアのデジタル化と紙の本のゆくえ』改訂 2 版，出版メディアパル，2010.
電子出版・電子書籍に関する本は最近増えているが、歴史的経過とデータを踏まえ、現状を客観的に概観するためにはこの本が不可欠。著者は大手書店勤務から研究者に転じた方。

<7>長谷川一『出版と知のメディア論：エディターシップの歴史と再生』みすず書房，2003.
<8>佐藤郁哉，芳賀学，山田真茂留『本を生みだす力：学術出版の組織アイデンティティ』新曜社，2011.
いずれもやや難しい内容だが、出版の意味をより深く知るためには有益なのがこの 2 点。ともに学術出版に焦点を当てている。特に<8>は出版社の実情やナマの声を読める点で貴重かつ有益。

[図書館の立場から]
<9>根本彰『続・情報基盤としての図書館』勁草書房，2004.
「続」の前に、同じ根本教授による『情報基盤としての図書館』（勁草書房，2002）も発刊されているが、こちらの「続」のほうは公貸権、コレクション構築、地域資料と「図書館資料論」に密接にかかわる内容。

<10>安井一徳『図書館は本をどう選ぶか』勁草書房，2006.
「図書館資料論」の中では「コレクション構築の基準」（本をどう選ぶか）に密接にかかわる内容だが、司書講習での学習を終えてからでないと理解が難しいかもしれない。ちなみに、安井氏の大学卒業論文がこの本のもとになっている。

<11>『ず・ぼん』不定期刊，ポット出版，1994-．（現在、第 16 号(2011)まで刊行）
図書館関係の雑誌の中でも、資料購入の実情、図書館と書店との関係など、「図書館資料」の実情がよく分かる記事が多く掲載されている。出版社のウェブサイト(http://www.pot.co.jp/zu-bon/)から、多くのバックナンバー記事を無料で読むことができる。

<12>井上真琴『図書館に訊け！』ちくま新書，2004.
「図書館資料」にかかわる明快な解説があるが、ほかにも資料組織、レファレンスなど、図書館の機能の全体像をつかむことができるので、強く一読を薦めたい。